

## 渡邊聡明先生を偲んで

大腸癌研究会 名誉会長  
杉原 健一

去る 2017 年 9 月 29 日、本研究会会長の<sup>わたなべとしあき</sup>渡邊 聡明 先生がご逝去されました。享年 59 歳でした。渡邊先生は東京大学大学院腫瘍外科・血管外科教授、日本外科学会理事長、大腸癌研究会会長、骨盤外科機能温存研究会代表世話人などの要職に在り、先生のご逝去は日本の外科診療、大腸癌診療、炎症性腸疾患の診療、内視鏡外科、ロボット手術の発展において多大な損失と言わざるを得ません。

渡邊先生は 1985 年 3 月に東京大学医学部を卒業され、4 月から東京大学第一外科で研修を始め、その後市中病院での初期外科研修を行いました。私は丁度 1985 年 5 月から 2 年間英国に留学し、帰国後 2 年間の東京大学第一外科での勤務の後、1989 年に国立がんセンター病院（現・国立がん研究センター中央病院）に異動しました。このように、お互いの勤務の関係で暫くの間お会いする機会がなかったのですが、1993 年に渡邊先生が同センターのチーフレジデントとして赴任されたのが、最初の出会いでした。同センター外科のチーフレジデントは、自らの研鑽だけではなく、レジデントの指導・管理、大腸外科のすべての入院患者の状態の把握、スタッフとレジデント間の情報の橋渡しなど、多忙・過酷な仕事ですが、渡邊先生はほとんど泊まり込むような毎日を送り、スタッフやレジデントから信頼されていました。私とも一緒に大腸癌の手術を沢山こなしました。さらに、手術データをまとめて、国内だけでなく米国での学会発表も精力的に行っていました。非常に優秀なチーフレジデントでした。1995 年には米国 Johns Hopkins 大学に留学されています。

帰国後は東京大学第一外科に勤務し、武藤徹一郎教授の指導の下、大腸癌ばかりでなく炎症性腸疾患の診療・研究に頭角を現し、1999 年からは武藤教授の後任の名川教授の下で助教授として第一外科を支え、2006 年に帝京大学外科教授として赴任されました。帝京大学では外科教室の責任者としてますますその才能を発揮し、シンポジストやパネリストとして各学会で鋭い切り口の研究成果を発表するとともに、類まれなる英語力を発揮して多くの欧米医学雑誌の編集委員を務め、国際学会の重要ポストにも就任されました。

研究業績にも目を見張るものがあります。特に大腸癌関連の遺伝子研究は、N Engl J Med (2001年)、Cancer Res (2006年に2編)、J Clin Oncol (2012年)などの一流誌に論文として掲載されています。これらの研究・臨床での活躍が評価され、2012年に東京大学大学院腫瘍外科・血管外科(旧・外科学第一講座)の第12代教授に就任されました。さらに2013年には東京大学医学部附属病院副院長、2015年には日本外科学会第3代理事長に就任されています。

特筆すべきは、優れた事務能力をいかに発揮され、大腸癌研究会の第4代会長 武藤徹一郎先生と第5代会長の私の時代の計18年にわたり、研究会の事務・運営を一人で切り盛りし、大腸癌研究会の発展に大きく貢献されたことです。さらに、委員長をされたプロジェクト研究の成果は2016年のGastroenterology誌に発表され、論文中の写真が同誌の表紙を飾りました。大腸癌治療ガイドラインの改訂にも尽力され、2014年版・2016年版のガイドライン作成委員長を務められました。本年2月にその長年にわたり注力されてきた大腸癌研究会の第6代会長に就任され、今後さらに本研究会が発展することが期待されていた矢先の悲報となってしまいました。

道半ばでこの世を後にされたことは、ご本人にとっても我々にとっても非常に残念なことです。心からご冥福をお祈り申し上げます。